

ミラーレス解禁、広がる車載カメラ市場

◆ミラーレスの自動車を設計・製造することが可能に

国土交通省は、2016年6月、自動車の保安基準を改定し、自動車のバックミラーやサイドミラーの代わりに、国際基準に適合する「カメラモニタリングシステム」(CMS)を備えることにより、ミラーレスの車の設計・製造を認めると発表した。15年11月に、自動車の国際基準を定める国連の自動車基準調和世界フォーラム(WP29)において国際基準が改正されており、今回、国内で解禁された。

バックミラーで最大手の村上開明堂は、6月、ルームミラーにカメラモニター機能を搭載した電子ルームミラーを開発した。故障や事故などの電源喪失時や乗車前後のエンジン停止時には自動で従来のミラーに切り替わる安全機能も有している。開発品は、1画面タイプ(2カメラ)と3分割画面(4カメラ)の2種類で、3分割画面タイプは従来のミラーでは確認できなかった側方の死角を大幅に削減した。18年度の量産を予定しており、占有していた市場での代替品を投入する。

◆車載カメラ搭載により、視線移動を減らす安全性に期待

東芝は、16年5月に開催された「人とくるまのテクノロジー展」で、次世代コックピットソリューションを出展した。独自の画像合成技術を用いて、サイドカメラとリアカメラの画像からサイドミラー画像(合成画像)を作成し、それぞれ単独のカメラでは死角となっていた領域をなくした。ルームミラーを確認する必要がないため、運転中の視線移動が減りドライバーの疲労を軽減できるとしている。

16年1月に米国ラスベガスで開催されたCES2016では、独BMWが左右のドアミラーとルームミラーをなくしたコンセプト車「i8ミラーレス」を初公開した。ミラーの代わりに3台のカメラが装備されている。

車載カメラはバックモニター用に視覚の補助として普及したが、これからはミラーに代わる存在となる。安全性向上の観点から、車1台あたりのカメラの搭載数は増加基調にあり、また画素数も18年には200万画素を超えるとも言われている。認識・判断・制御を担う画像認識や画像処理など、周辺技術の開発も活発化しており、運転者の負担を軽減する安全性技術に期待したい。 【米山久美子】